
永久に奏でる愛のうた

妃 アリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久に奏でる愛のうた

【Nコード】

N6708Y

【作者名】

妃 アリア

【あらすじ】

金、権力、地位、望んだものは何でも手に入れてきた 社長子息
の鷹宮 奏夢 たかみや かなめ

それでもどこか空虚な日々を過ごしていた。

そんなある日、ホテルのロビーで一人の少女と出逢う。

これは、愛を知らない男と、愛されることを知らない少

P r o l o g u e (前 書)

P r o l o g u e

誰もいないと思ってた

この広い世界の中で 私を、私だけを見てくれる人

見つけてくれた 貴方だけなの

風が冷気を帯びている

街は冬の色 クリスマスのイルミネーションが煌めく

有名ホテルの某有名企業主催のパーティー会場で 男は不機嫌だった。

行きたくもなかったパーティーに出席しており

声を掛けてくる大人達からは 二言目には結婚の話をされる。

その恵まれた外見のおかげで 女には不自由していない彼にとって

結婚など、自由を奪われる面倒事。 興味はない。

男の名は 鷹宮たかみや 奏夢かなめ

世界規模で事業を展開する鷹宮グループの社長子息だ。

「奏夢君、今夜ぜひ私の娘を紹介したいのだが。」

「奏夢様の好みはどのような女性で？」

「先月で27歳になられたとか。そろそろ身を固めることもお考え

でしょう。」

鷹宮と繋がりが欲しいという 見え透いた下心を持って近づいてくる輩達。

「ありがとうございます。でもまだ独りを楽しみたいので。」

顔に笑顔を張り付け、真意は決して見せない。

「吉田、エントランスに車を回してくれ。」

「かしこまりました。」

最低限の挨拶は済ませた。早くこの場をぬけ出そうと

秘書の吉田に車の手配を頼んだ。

エレベーターでロビーへと下りる。

考えたこともなかった。誰かから目を逸らせなくなることがあるなんて

第1話

エレベーターを降りたところで、吉田から電話があった。

『申し訳ありません。お車を回すのに少々時間がかかりそうです。』

今しばらくお待ちください。』

「ああ。分かった。」

今日は週末ということもあって
ロビーでは大勢の人が行き交っている

車が来るまでソファーにでも座って待っていようと　歩き出した
奏夢だったが

その時、　視線が一人の少女の前で止まった。

白のワンピースに　黒のショールを纏った少女は

ソファーに一人座って　じつと外を見つめ

静かに、ただ静かに涙を流していた。

それはまるで1枚の静止画みたいで、

彼女の周りだけ 時が止まっているようだった。

忙しく行き交う人の中で 静かに涙する彼女に気づくものは誰も
いなかった。

それは、むしろ彼女が、まるで自分の存在を消すかのように

ひっそりと佇^{たたず}んでいたからかもしれない。

気づけば、奏夢は不思議と吸い寄せられるかのように

少女の向かいの席に座っていた。

第2話（前書き）

第2話

奏夢が少女の前に座ると同時に 外を眺めていた少女が奏夢の方を向いた。

見知らぬ男が目の前に現れたことに 少女は少し怯えた顔をし

口をひらけ 何か言葉を発しようとした時

それを遮るかのように 奏夢の口から何故か自然に言葉が出た。

「泣きたい時は泣けばいい。」

奏夢は言葉を続けた。

「悲しい時は泣け。」

少女は少し驚いたような顔をした。

そして小さくうなずくと 再び涙をぼたぼた流し始めた。

奏夢は立ち上がり、そっと少女の隣に座ってその肩を抱きしめた。

少女は奏夢の肩に顔を埋め、その涙が止まるまで静かに泣いた。

それはあまりにも自然な動作で 誰も2人に目を向けるものはいなかった。

ただ、ロビーの風景の一つとして 溶け込んでいた。

第3話（前書き）

第3話

少女が奏夢にもたれて泣いていたのは、

それは時間にしてほんの数分のことだった。

「奏夢様、お待たせしました。」

吉田が車を回して来たからだ。

「あの、その少女は？」

そして、奏夢の隣の少女に目を向け、尋ねた。

普段、奏夢が遊びでしか女と付き合わないことを

吉田は知っているため、この光景をみられたことに

少しバツの悪いような思いになり、奏夢は言葉を濁した。

「・・・ちよつとな。」

そう答えて、視線を少女に落としたところで 奏夢は驚いた。

なんと、少女は奏夢の肩にもたれたまま、泣きつかれたのか、眠りに落ちていた。

「お部屋をお取りしましょうか？」

その様子を見て、吉田が言った。

「……頼む。」

起こすのが躊躇ためらわれるくらい

あまりにも穏やかな寝顔だった。

第4話（前書き）

第4話

急な宿泊だったが、鷹宮の名前を出せばすぐに部屋は取れた。

案内されたのは最上階のスイートルーム。

「では、奏夢様。明日の朝は8時にお迎えに上がります。」

吉田はそう言うと、再びエレベーターの中へ消えた。

部屋に入ると、奏夢は抱きかかえていた少女をベッドの上に降ろし

た。

少女は起きる気配もなく、スヤスヤ眠っている。

その寝顔を見ていると、奏夢もだんだん眠気がしてきた。

そして、上着だけ脱ぐと、ベッドに倒れこんだ。

見知らぬ少女と同じベッドで一夜を過ごす・・・

というのは、色々ちょっとまずいような気もしたが、

ベッドはキングサイズだから、お互いが端と端に寝れば距離があるし、

それよりなにより、そんな事を考えるのが、もう面倒なほど疲れていた。

「まあ、別にいいよな。」

自分を納得させるように呟くと、素直に眠りの世界に誘われた。
こゝろ

第5話

「きゃっ。」

小さな叫び声が聞こえ、奏夢が目を開けると

窓からは朝日が降り注ぎ、眩しくて思わず目を細めた。

と、そんな奏夢の視界にベッドの端にいる小さな姿が入った。

小さな姿は、この状況が呑み込めてないようで、

キヨロキヨロと不安げに辺りを見回していた。

“ ああ。そうだったな。”

「君、昨日ロビーで泣き疲れて寝ちゃったから、ここに運んだんだ。」

とりあえず、奏夢はこうなつた経緯^{いきさつ}を軽く説明した。

すると、昨夜の事を思い出したのだろう。少女は更に身を縮め、小さな声で呟いた。

「ご迷惑お掛けして申し訳ありません・・・」

「いや、別にいいけど。」

そう答えながら、奏夢は改めて少女を見た。

愛らしく整った顔、日本人離れした白い肌、

でもどこか影のある、愁いを帯びたような雰囲気。

理由は分からないが、少女のすべてが奏夢を惹きつけた。

第6話

P P P P P P P P P P

携帯電話の着信音が沈黙を破った。

「はい。」

『おはようございます奏夢様。』

昨夜お伝えした通り、8時にお迎えに上がります。
『

電話は吉田からだった。

時計を見ると、時刻は7時半。

昨夜吉田が迎えに来る8時まであと30分だった。

電話を切った奏夢は、少女に向き直って言った。

「俺、これから仕事だから、家まで送る。」

この言葉に少女は、ふるふると首を横に振りながらポツンと呟いた。

「帰りたくない・・・」

「帰りたくない？」

奏夢が聞き返すと、少女はコクンと頷いた。

「なんでだ？」

その問いに、少女は悲しげに微笑みながら、諦めたように言った。

「帰る家なんてないもの・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708y/>

永久に奏でる愛のうた

2011年11月26日02時51分発行